

アテネ五輪が残したもの

盛田 常夫

ギリシア選手のドーピング騒動で幕を開けたアテネ五輪は、ハンガリーのドーピング・スキャンダルで幕を閉じた。ギリシアの短距離の英雄ゲンドリスが同僚の女子選手とともに、五輪前のドーピング検査を逃れるために、狂言事故で病院に入院するという何とも奇妙な騒動があった。CNN は連日この事件を取り上げ、開幕前から、アテネ五輪は反ドーピング五輪を象徴するような出だしとなった。結局、本人たちが五輪出場を辞退することで当座の決着は図られたが、ハンガリーのドーピング問題とともに、五輪後に再調査や処分が下される可能性は高い。

日本のメダルラッシュは 8 月 22 日の女子マラソンで頂点に達し、それに続くハンガリーのアヌシュと室伏広治のハンマー投げ一騎打ちでハンガリーが沸いた。翌々日の円盤投げでも、ファゼカシュが五輪新で金メダル。ハンガリーの勢いも最高潮に達した。しかし、その直後にドーピング疑惑が続出し、ハンガリーにとってなんとも苦い五輪になってしまった。

ハンガリーはドーピングで金メダル 2 個、銀メダル 1 個を失い、メダル獲得ランキングで 9 位になるところが、13 位に後退した。これにたいして、日本はハンマー投げの繰り上げ 1 個を加えて東京五輪以来の金メダル獲得数になった。ハンガリーにとってのせめてもの救いは最終日の水球五輪 2 連覇。ドーピング疑惑で積もり積もった鬱憤を晴らす快挙になった。

ドーピング疑惑

ドーピングで 3 名のメダリストと 2 名の失格者を出したハンガリーは、アテネ五輪ドーピング・スキャンダル第一位のレッテルを貼られることになった。スポーツ大臣のジュルチャーニィはドーピングに関与していた競技団体への国家補助打ち切りを示唆し、国際的な名誉回復に努力する姿勢を見せている。また、ハンガリー五輪委員会のシュミット委員長も IOC の決定に従うことを明言している。

ハンガリーの重量挙げの選手がドーピング陽性反応で文句なしの失格処分を受けたのにたいし、ファゼカシュの場合は検査尿量の不足、アヌシュの場合はハンガリーに戻ってからの再検査拒否が直接の理由になっている。ファゼカシュとアヌシュのケースはドーピングの証拠がないまま、検査規定違反でドーピングと判断された。ハンガリー人の多くは積然としない気分だろう。

ただ、いろいろな筋の意見を聞いてみると、両人が属しているソンバトヘイの陸上クラブがドーピングに関与していた可能性を排除できないようだ。とくに、ファゼカシュは検

査前からマークされていたようで、競技後の検査で「屈辱的な扱いを受けた」と語っている。他人の尿を隠せる可能性のある人体の穴をすべて綿密に検査され、非人間的な扱いを受けたために規定量の尿が出なかったのだ、とファゼカシュは語っている。

ドーピング検査組織がファゼカシュをマークしていたのは、ドーピングにかんする匿名の内部告発の手紙がハンガリーから IOC に届いていたからだと言われている。オリンピック代表に選ばれなかった投擲選手が告発したのではないかとされている。その告発文には、他人の尿の入った袋と管を肛門に忍ばせ、検査でこれを出すという手の込んだやり方が示されていたようだ。それでファゼカシュに対する徹に入り細に入る検査となった。ただ、どのような状況であれ、排出できた尿量が 25ml というのはいかにも少ない。要求されている 75ml の量など、それほど水を飲まなくても 1~2 時間で簡単に出る量だ。4~5 時間経ってもこの程度の量すら出せないのは、出したくなかったと思われても仕方がない。

ところが、ファゼカシュと同じクラブに属するアヌシュの検査は簡単に済んだ。明らかに、ドーピング検査組織はアヌシュをマークしていなかった。同じクラブに属しているという認識がなかったのかもしれない。アヌシュは 5 投目の投擲が終わり、勝利を確信したところで、やや長い時間トイレに行くという不可解な行動をとった。それが室伏選手や競技委員に目撃されている。競技直後に尿検査があるので、競技終了直前にトイレで用を足すというのは奇妙だ。また、勝利が決まっても最終試技を行うのが普通なのに、アヌシュは最後の投擲を止めた。そして、室伏によれば、用を足した直後なのに、アヌシュは誰よりも早く尿検体の提出を済ませ出てきたという。これらの証言から、五輪期間内の再検査の実施が決められたが、アヌシュはその検査を拒否したために、メダル剥奪となった。

ドーピング検査組織によれば、アヌシュの競技前と競技後の尿検体が、それぞれ別人のものである可能性が高いという。もしそうであれば、アヌシュの奇妙な行動が理解できるが、真相は検体の DNA 鑑定を待たなければならない。もし別人のものであれば、アヌシュの選手生命は終わるし、ハンガリーの陸上競技界にとって前代未聞のスキャンダルになる。逆に、すべての検体が同じアヌシュのものであることが証明されれば、今回の処分は疑問視される。いずにしても、今回の疑惑を契機に、ドーピング検査の方法が大きく変わる可能性がある。

ラドクリフは何故負けた

1 年前のこの分析シリーズで、ラドクリフの五輪勝利に立ちはだかる障害を 4 点ほど列挙した。このうちの、怪我、暑さ、時間という要素が、そのままアテネ五輪の勝利を阻んだ。

2003 年が五輪の年であったなら、ラドクリフは文句なく優勝していただろう。コースや天候に関係なく、絶対的な力の差が明瞭だったからだ。同じことは、2003 年に現役選手最高記録をマークした室伏広治にも言える。しかし、選手には好不調の波がある。好調時には怪我をする確率が高くなる。調子が良いと、どうしても限度以上の負荷をかけやすくなり、それが怪我を誘発する。昨年から今年にかけて、ラドクリフは臍と腰を痛め、ヘルニ

アの手術を受けた。室伏は腰を痛めた。これで絶好調の波は下降線に入った。4年に一度の大会に、絶好調で臨める選手はどれほどいるだろうか。五輪で勝つためには「時の運」という要素が非常に大きい。

ラドクリフの走りを初めて見た人は、あの激しい首振り運動がエネルギーロスの原因だと思うかもしれない。しかし、これはほとんど影響していない。腕の振りもかなり強いが、その割に横からみた両肩の前後の揺れが少ない。彼女は腕を前後に振るといふより、上下に振っているのだから、上体の前後の揺れが小さい。上半身の運動で見ると、不合理な動きはない。

こうした表面的な特徴より、ラドクリフの走法で気になるのは足の蹴りである。先頭集団いた選手の中で、たとえばアテムやヌデレヴァはストライド走法とピッチ走法の間でテンポで軽やかに足を運んでいた。非常に柔らかいフォームだ。野口もラドクリフもストライド走法だが、ラドクリフが大きく足を蹴り上げる走法なのにたいして、野口は小さな蹴りで歩幅を大きくとるといふ走り方をしている。ピッチ走法に近いストライド走法なのだ。アテネの長い登り坂でどちらの走法が合理的か、明らかだろう。ラドクリフの走法は1万米の走法。これで登り坂を走ると、余分な疲労が溜まるのは目に見えている。

テレビ中継を見始めた時にはすでに10キロを過ぎていたが、ラドクリフは集団の中で走っていた。この時点でラドクリフは勝てないだろうと予想した。ラドクリフが勝てるのは、ダントツの一人旅の場合だけ。他の選手と競った経験がないので、駆け引きができないからだ。そのままダンゴで行けば、アテムかヌデレヴァが30キロ過ぎてから抜け出ると思った。

ここ2年ほど、ラドクリフは集団の中で競って走ったことがない。五輪前の陸上グランプリ大会でも、ペースメーカーをつけた1万米に出場して、圧倒的な強さで優勝した。マラソンと1万米の両種目制覇を狙うために準備だったが、「二兎を追う者は一兎をも得ず」の諺の通りになった。スピード練習とスタミナ練習は相反するので、これを同時に追求するのはかなりの冒険になる。さらに、単独レースを続けていると、集団で走りながらスピードが何度もギアチェンジされるレースに巻き込まれた場合、経験したことのない疲労が生まれる。だから、ラドクリフが勝つのは、最初から飛ばしてそのまま突っ走るケースで、そのシナリオが崩れた場合には勝てないと考えた。それでも、昨年なら、絶好調があらゆる障害を克服していったら。しかし、今年は下降状態に入っていたから、それができなかった。

ラドクリフやヌデレヴァを完膚無きまでにうち負かした野口は立派。アテネのコースで26分台は、平地の20分を切る記録に匹敵するだろう。これで野口は高橋に並んだ。

それにしても五輪は魔物。驚異的なマラソン世界記録を持つラドクリフは、これで無冠のまま競技生活を終わることになる。トラックでもマラソンでも、ラドクリフには世界選手権や五輪のタイトルがない。これは人生の巡り合わせというしかない。ラドクリフの涙は、自らの悲運を嘆く涙。アテネ五輪委員会は、ラドクリフのために、わざわざマラソ

ンと 1 万米の競技日程を入れ替え、かつ双方の競技への参加が可能なように日程を開けて準備した。しかし、マラソンと 1 万米の制覇という偉業は、今回も達成されなかった。北欧の平地で五輪のマラソンが行われれば両種目制覇もあり得ようが、夏の大会であり続ける限り、この偉業が簡単に達成されるとは思われない。

マラソン選考は要再考

今回の五輪を見て、つくづく、オリンピックで勝つのがいかに難しいかを知らされた。ハンガリーのチェ・ラスローは五輪前の仕上がりが良かったのに、競技 3 週間前に不注意で足を骨折した。すぐに金属で骨を固定し、3 日後に練習を再開したが、百分の 1 秒を争う水泳競技ではこれは致命的だった。話題のフェルプスに対抗できる力を持ちながら、四百メドレーで銅メダルに終わってしまった。他方、15 歳のジュルタが二百米平泳ぎの北嶋と競うことになるなど、誰も予想していなかった。若い力の急速な伸び、事故や怪我、天候や条件などが、予想を超えた結果を生み出していく。

明らかになったことが一つ。夏の五輪大会のマラソン代表選考に、福岡や大阪などの冬のレースを使ってはならないこと。今回のマラソンレースほど、冬のレース結果が参考にならないことを教えてくれたものはない。